



2月の園だより



2019年 2月
園長 郡山 健次郎

主 題：認め合う

聖書のことば：「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。

すべての事に感謝しなさい。」

(テサロニケ5：16)

☆ ————— ☆ ————— ☆ ————— ☆

今月のみ言葉は「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい」です。およそ2000年前に書かれた聖パウロの言葉です。この言葉を聞くと、誰もが言いたくなると思います。「そんなの無理！」確かにそうですが、パウロは無理と分かっている、信徒たちを励ますために書いたのでしょうか。それとも、「ぜひそうして欲しい」という強い望みを持って書いているのでしょうか。もちろん後者です。その理由を次のように続けます。「キリスト・イエスにおいて、神があなた方に望んでおられることです。」

実は、このパウロの言葉の背景にはイエスの十字架の死という出来事があります。もちろん、イエス様は十字架での不条理の死を喜んで受け入れたわけではありません。かといって、無理強いされたわけでもありません。

確かに、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と悶絶します。しかし、「父よ、私の霊を御手にゆだねます」がイエスの最後の言葉でした。

実は、イエスのこの壮絶な死こそがキリスト教道徳の根底をなすものとなりました。人間的に考えるならイエスの十字架の処刑は、いわゆる冤罪に当たるものです。しかし、イエスの復活を見た弟子たちは、どんな苦境にあっても、イエスに倣って、「父なる神にゆだねます」を合言葉に生きていくことができるようになりました。

パウロの勧めの言葉は、そんな弟子たちの生き方を踏襲するものでした。また、キリスト者の迫害を天命と信じていたパウロ自身がそのキリストから許されたという体験からくるものでした。

そうはいっても、私たちには、そうそう簡単にできそうにはないのですが、日本にも、「罪を憎んで人を憎まず」という美しいことわざがあります。また、「艱難 汝を玉にす」という言葉もあります。さらに、「雨降って地固まる」など日本文化には道徳生活の基盤をなす豊かな思想があることに気が付きます。日常生活で、思うようにいかないときでも、こうして見通しを立てることができるなら「いつも喜ぶことができる」のだと思います。また、2月の主題の「認め合う」も大きな課題ですが、パウロの言葉や日本文化の背景を思うとき、お互いの違いは問題の発端ではなく、個性の輝きであって、豊かな人間関係を生むものとして歓迎したいことのように思えてきます。この2月も、そんな前向きな生き方ができるようにお互いのために祈り合い、感謝し合いながら歩いていけたらと思います。

